

太平記 卷第十六 日本朝敵の事

(前略) 又天智天皇の御宇に藤原のちかた千方よといふ者あつて、金鬼、

風鬼、水鬼、隱形鬼おんぎやうきといふ四つの鬼を使へり。金鬼きんきは

其の身堅固にして、矢を射るに立たず。風鬼ふうきは大風を吹

かせて、敵城を吹き破る。水鬼すいきは洪水を流して、敵を

陸地に溺おぼらす。隱形鬼は其の形を隠かくして、俄に敵を拉とりひくぐ。

斯くの如くの神変、凡夫の智力を以て防ぐべきに非ざれば、伊賀伊勢の両国、これがために妨げられて王化に順したがふ者なし。爰に紀朝雄きのともをといひける者、宣旨を蒙かうむつて彼の国に下り、一首の歌を詠みて、鬼おにの中へぞ送りける。

草も木もわが大君おほきみの國なれば

いづくか鬼おにのすみかなるべき

四つの鬼此の歌を見て、「さては我等悪逆無道の臣に随したがつ

て、善政有徳の君を背き奉りける事、天罰遁るゝ処なか
りけり。』とて忽ちに四方に去つて失せにければ、千
勢ひを失うて軀て朝雄に討たれにけり。 (後略)